

Boston Emotion Diary: The Final

有光興記 (駒澤大学)

私は、2014年4月から2015年3月にかけて、Boston UniversityのCenter for Anxiety and Related Disorders (CARD)のStefan G. Hofmann先生の下で研究を行ってきました。初のアメリカ長期滞在ということもあり、いろいろと刺激的な生活を送りました。感情にまつわる雑多なことは、学会のニュースレターに書いてきました。今回は、その最終版として、Boston CollegeのJames Russell先生のインタビューを中心に、ボストン界隈の研究者情報を書きたいと思ひます。

1. Center for Anxiety and Related Disorders (CARD) at Boston University

Boston Universityは、ボストン市とケンブリッジ市の中心を流れるチャールズ川沿いにある、東西に長い大学です。Martin Luther King牧師が、この大学院を卒業しています。私が所属したのは、社交不安症の実験および臨床治験を専門としているHofmann教授のPsychotherapy and Emotion Research Labでした。2, 3のリサーチを教授を中心とした研究室のメンバーで取り組むという経験ができて大変良かったです。

CARDは、認知行動療法で世界的に有名なDavid Barlow先生が設立した機関で、世界中から研究者が学びにきています。私も10ヵ国ぐらゐの先生方と知り合いました。興味関心が同じ研究者とゆっくりと話げできたのも、得がたい経験だったと思ひます。

Boston Universityには、心理・脳科学部があり、43名の教授陣がいます。心理学が理系で、脳科学と心理学が融合している点は、近年のアメリカの傾向のようです。多くの留学生を受け入れており、中国系の方が多ゐるのが印象的でした。

2. North Eastern University

ボストン美術館の近くにある総合大学です。ここには、jealousyやcompassion、そのほかの感情研究で優れた論文を發表されてゐて、EmotionのEditorでもあるDavid DeSteno先生がいらっしやいます。3月に同じ大学に所属されてゐて、感情の脳科学研究で大変有名なLisa Feldman Barrett先生主催で、Boston Area Affective Scientists Meetingが開催されました。この会には、脳科学、感情心理学、臨床心理学の国際的に著名な研究者が集まりました。これから研究者、特に

院生の研究室間の交流を進めようということゝ、国際的な業績を出していくには分野を融合した理論的、技術的アプローチが必要であると、強く感じました。

3. Harvard University

ボストンと言えばHarvardかMITをイメージする方も多ゐると思ひます。Harvardはチャールズ川の北側のケンブリッジ市にあります。世界的な有名な大学で、留学生も多く、医学部には日本人も多数在籍してゐます。観光名所でもあり、多くの方が訪れる大学でもあります。心理学部は30名を超える教授陣を擁し、幼児の感情研究のJerome Kagan先生が特に有名でしようか。私は、社交不安症研究で有名なRichard J. McNally先生とはお話しする機会がありました。感情研究者なら、モラル研究のJoshua Greene先生、感情科学のLeah Somerville先生にも要注目かと思ひます。

4. Boston College

Boston Collegeは、Boston中心街よりトラムで30分ほど郊外にあるChestnut Hill市にあります。心理学部には、22名の教授陣がおられ、昨年日本心理学会で来日されたJames Russell先生のほかには、感情と記憶の脳科学研究で有名なElizabeth Kensinger先生もいらっしやいます。川沿い、高速道路沿いで、ビルが校舎のBoston Universityと違って、閑静な住宅街にあり欧風の古い教会や校舎からなるBoston Collegeは情緒豊かな大学です。また、中東系の留学生が多く、Russell先生のところにもインドから来た院生が比較文化研究を行ってゐました。

本年の2月にラボを見学してきてました。リサーチ・アシスタントが1名、院生が4名、そのほかは学部生のボランティアという陣容で、これは所属していたラボも同じでして、アメリカの標準的な研究室のありようでしようか。私の研究を發表させていただいたのですが、全員感情の表出研究に詳しく、熱い議論ができました。これは、論文のアクセプト時と同時に、研究者の最大の喜びですね。

それでは、2015年2月19日に行われたインタビュー¹²をお届けします。

有光：日本感情心理学会に向けて、お話しいただき、あ

¹ インタビュー内容は録音したものを、Russell先生に確認していただいたものを、著者が翻訳した。原文を読みたい方は、著者までご連絡いただきたい (e-mail: arimitsu@komazawa-u.ac.jp)。

² emotionは感情、moodは気分と翻訳し、初出の際に明記した。feelingについても感情と翻訳したが、emotionと連続して使用されているため、すべてについて英語を併記した。

りがとうございます。

Russell先生：よろこんで、お話しします。

有光：最初に、先生の感情 (emotion) に関するご関心について、お話いただければと思っています。何が先生の感情に関する関心を刺激したのでしょうか。

Russell先生：私のキャリアは、常に感情を中心に置いています。最初は、大きな規模の環境、すなわち、ビル、公園、町に関心がありました。そうした環境が私たちに影響を与えることの1つとして、ある種の気分 (mood) を生み出すのではないかと、直感的に思いました。ある場所ではストレスフルを感じるし、ある場所ではリラックスできる、ある場所は興奮して楽しくなるし、ある場所は落ち込ませる、といった具合です。私は、様々な場所についてどのように感じるかを測定する尺度を開発し、結果として、ある場所における気分によって、どのように行動を変えるのかを研究しました。そのあと、一体感情とは何なのか、気分とは何なのか、感情と気分の関係について自分に問いかけ始めました。そうすると、ある問いかけをしたら、他の問いかけが生じるのです。1つの問いかけがあり、それに十分に答えようとするなら、他の問いかけにも答えないといけない。そして、それに答えると、まだ他の問いかけに答えなければならないのです。感情は、一体となった大きなパッケージなのです。私のキャリアは、そうした質問に答えるために、多くの時間を費やしています。

有光：先生は、人々がどのように感情を経験するのを探求しているというわけですね。

Russell先生：そうです。

有光：ご研究について、2, 3お伺いしたいことがあります。先生は、どのように感情を定義しますか。

Russell先生：そうですね。私は、感情と言うのは英語の用語 (term) の1つだと思っています。感情は、伝統的な用語で、常に、少なくとも何百年は使われています。また、感情が生まれつき私たちに与えられた何かで、何であるのか理解しなければならぬ何かだと考えるのは、あまり有益だと思いません。むしろ、感情は、1つの英語の用語で、日本語には他の用語がありますし、他の言語には他の用語があります。もちろん、そうした用語はすべて実際の世の中で起こっている出来事を表しています。しかし、感情語で表される様々な出来事は、非常に複雑ですし、異質なものです。

有光：そういうわけで、感情の定義の比較文化にご関心があるのですね。

Russell先生：非常に興味があります。

有光：次の質問は、先生が行われた感情語彙 (emotion lexicon) の言語的分析についてです。現在は、コア

感情 (core affect) と感情の心理学的構成のモデルを提唱されています。このモデルは、前に進んでいく、変化していくとお考えでしょうか。

Russell先生：はい、もちろん。モデルは、私たちみんなが変化すると同じ意味で、変化します。多くの研究によって、いくつかの古い考えがシンプルすぎる、物事はもっと複雑であること、いくつかの考えが正しくないことが明らかになりました。例えば、何か肯定的か否定的な感情を感じたら、具体的な感情でなくても、少なくとも肯定的か否定的かは表情に現れると考えていました。しかし、イスラエルの Hillel Aviezer が、近年テニスの選手に関する研究を行いました。皆さんがご存知かはわかりませんが、彼は、テニスの試合の勝利者と敗者の写真をインターネットから集めてきました。表情からは、誰が勝ったのか負けたのか、言い当てるのができなかったのです。この考えはうまくいきませんでした。そうですね、こうした考えは、変化しました。

有光：先生は、そのようにして、モデルをより良く変化させているのですね。

Russell先生：そう望みます。

有光：近年、先生は子どもの感情認識 (recognition of emotion) に関する論文をいくつか発表されています。大変興味深い内容です。その中で、どのような発見がありましたか。

Russell先生：子どもの感情認識は、現在 Yale Center for Emotional Intelligence にいる (インタビュー後、The Center for Education Policy Analysis at Stanford University に移動) Sherri Wideman さんが主に取り組んだものです。彼女は、この一連の研究の主力でした。私たちは、基本的には子どもたちがどのように感情を理解しているのかを尋ねました。理想的には、子どもたちがいつから自分自身の感情を理解するようになるのかを知りたいと思っていますが、それを研究するのは難しいのです。そのため、子どもたちに表情の写真を見せたり、話を聞かせたり、感情語 (emotion words) を呈示したりしました。大筋で発見したと思えることは、子どもたちは肯定的、否定的、覚醒の程度を表す簡単な言葉で他者の感情を考えることから始めるということです。子どもたちは、広いカテゴリーの中で感情をゆっくりと区別し始めます。つまり、すべての否定的感情は、単に否定的というところから始まって、そうして怒りと他の否定的感情を区別するのです。

有光：それでは、子どもの感情認識を理解することが、人間全体の感情を理解することにつながるのですね。

Russell先生：その通りです。私は、もしかすると親や教師などが、実際に子どもたちが感情を認識しているよりも、もっと感情を認識しているという思い

違いをしているのではないかと考えています。例えば、親たちが今日は悲しいと言ったとしても、子どもは親がたった今怒っていたので元気なんだと思うことがあります。つまり、子どもたちは言葉や表情や感情の他のサインを誤って認識しているかもしれないのです。しかし、まだ私たちは、こうした示唆について研究を行っていません。

有光：それは、教育者や教師には良い提案となりますね。

Russell先生：人々がそのことを考えてくれることを望みます。

有光：先生は、この先感情研究がどのように進んでいくと思いますか。

Russell先生：私自身の考えは、感情研究においてこれまで行ってきた仕事の多くが、否定的感情に関するものだったということです。この考えではうまくいかないし、他の考えでもうまくいかないかもしれません。物事は、思ったよりも複雑なのです。私たちは、何千年も、感情が何であるのか、非常に簡単な素人考えを持ってきました。いくつかの考えは、認知や動物の性質などから離れています。しかし、すべてがシンプルな、シンプルすぎる考えです。感情研究で現在起こっていることの一部は、こうしたシンプルな考えを脇に置き、よりよい理解の方法への扉を開く必要を感じていることだと思います。例えば、感情は感情で、思考は思考と分けて考えることはできません。私たちは、どの瞬間でも多くの思考をしていますし、思考と感情(feeling)は常に同時に生起しているのです。思考と感情が分かれています、相反していると考えすることはできません。感情(feeling)は、思考の一形態なのです。

有光：心理学だけでなく、他のサイエンスのエビデンスも統合することもお考えでしょうか。

Russell先生：はい、その通りです。

有光：感情に関心のある日本の学生に何か伝えたいことはありますか。私たちは、何を行うべきでしょうか。

Russell先生：私は、日本を訪問して、とても楽観的になりましたし、日本には独自の感情概念(concepts of emotion)、伝統、何を表出すべきで、何を表出すべきでないかについて独自のルールがあることがわかりました。こうした文化独自の考えを研究で明らかにされるのを、とても楽しみにしています。その方が、ヨーロッパや北米の考えを日本で試してみるよりも、より興味深いと思います。日本本来の考えを探求するのがとても面白いと思います。それは、ヨーロッパや北米の人々に重要なことを教えることになると思います。

有光：今日は、私たちとお話いただきまして、ありがとうございました。

Russell先生：ありがとうございました。

10分弱のインタビューでしたが、論文を読んだだけではすぐにはわからないRussell先生の感情に関する考えが伝われば幸いです。最後の日本の感情研究者へのメッセージは、大変示唆に富むもので、大変うれしく思いました。Russell先生のところには、本学会の顧問の鈴木先生がご留学され、昨年の日本心理学会でご招待されたと伺っています。Russell先生は、とても日本のこと、日本の感情研究が気に入られており、またInternational Society for Research on Emotion (ISRE)で日本の研究者たちと会いたい、来日もされたいとおっしゃっていました。私たち、日本の感情の研究者に大変温かい気持ちをいただいたと思っています。今度は、私たちがRussell先生に自分たちの研究を発信していく番だと思います。

最後になりましたが、1年間という長期間の研究を許していただいた大学、大学関係者、学会関係者の皆さまに深く感謝の意を表したいと思います。また、在米中にお会いした研究者の先生方には、常に温かく受け入れていただき、ありがたく感じております。この原稿を書く機会をいただいたエモーション・スタディーズ編集部会の先生方にも感謝しております。ボストンに在住する多くの国際的な感情研究者の情報を少しでも皆さまに伝えられたなら、幸いです。

2014年度若手支援企画の記録

第22回年次学術大会前日、2014年5月30日15:30～17:30に、宇都宮大学学生会館において、日本感情心理学会としては初めての試みとなりました、若手支援企画が実施されました(参考：第22回年次学術大会HP <http://jsre.wdc-jp.com/conf/2014/contents.html>)。以下の内容は、日本感情心理学会ニューズレターNo. 52(2014年6月24日)の記事を改編し、企画者の確認をいただいたものです。

1. 「嫌悪の基礎と臨床研究会」

企画者：岩佐和典(就実大学)

(e-mail: kaiwasa00@gmail.com)

話題提供：

「嫌悪感受性の概念と測定」

岩佐和典

「精神疾患において嫌悪感が問題となる時～嫌悪感回避とその治療～」

田中恒彦(滋賀医科大学)

「密集物体による視覚的嫌悪感」

佐々木恭志郎(九州大学/日本学術振興会)

報告：

関係各位のご厚意により、嫌悪をテーマとするWSを開催することができました。このWSでは、基礎研

究と臨床事例，両方の話題提供が行われました。基礎と臨床の建設的な関係性を模索するうえで，感情はまさにうってつけの題材だと考えたからです。基礎は臨床に知恵や想像力を与え，臨床は基礎に不思議や閃きを与える，そんな関係性を嫌悪が取り持ちはしないかと期待して，本研究会の企画に至ったのでした。

本稿の筆者である岩佐は，嫌悪研究の中心的な概念である嫌悪感受性の測定法を紹介しました。研究にも臨床にも欠かすことのできない測定法に関する議論を終えた後，田中恒彦氏（滋賀医科大学）からは「精神疾患において嫌悪感が問題となるとき～嫌悪感回避とその治療」と題した臨床事例の報告がなされました。

曝露反応妨害法と呼ばれる心理療法を適用した2つの事例は，嫌悪が人の苦しみにどう影響し，そしていかにして人がその苦しみに自由になっていくのか，その様を明瞭に示すものでした。なぜある人の嫌悪は心理療法によって低減し，ある人の嫌悪は低減しないのか。同じく回避行動を誘発する不安と嫌悪は，何を共有し，何を共有しないのか。臨床事例から導かれるこうした疑問は，基礎研究のテーマとしても興味深いものだと感じられました。

そして，佐々木恭史郎氏（九州大学）からは「密集物体による視覚的嫌悪感」と題した研究発表がなされました。いわゆるトライポフォビアのメカニズムを，空間周波数の分析から読み解こうとするこの試みは，人間が何をどのように嫌悪するのか，そしてどのような機序でそれがもたらされるのかといった問題に光を当てたものであり，その学術的な意義は言うまでもなく，日々の臨床にも思考の道筋を与え得る知見だと感じられました。

フロアを交えた議論はもちろん，登壇者間の熱心な議論は，今後行われる嫌悪研究に，明るい未来が待っていることを予感させるに十分なものでした。

2. 「感情研究の現在を読む」

企画者：藤原 健（京大大学経営管理大学院／現所属：大阪経済大学）

(e-mail: k.fujiwara1985@gmail.com)

木村健太（産業技術総合研究所）

(e-mail: kenta.kimura@aist.go.jp)

藤村友美（産業技術総合研究所）

(e-mail: t.fujimura@aist.go.jp)

話題提供：

「Psychological Constructivism, *Emotion Review*, 5(4)」

藤原 健

「Emotion Reflected in the Autonomic Nervous System, *Emotion Review*, 6(2)」

木村健太

「Facial Expression, *Emotion Review*, 5(1)」

藤村友美

報告：

本企画では22名が集い（うち3名が企画兼発表者），感情研究の現在について議論を行うことができました。感想を記すに当たり，まず，企画者一同より集まっていただきました先生方に感謝を述べさせていただきます。

藤原：Psychological Constructionについての特集号を報告し，感情概念の捉え方について議論させていただきました。Psychological Constructionの立場では，感情は予測するものではなく記述するものであると位置づけられており，2つのcore systemsがどのように感情経験を創発させるのかが今後の議論の焦点になるようです。難解ではありますが，還元主義を基盤とする従来の科学観を覆すという意味で，今後も議論を追っていく必要性を感じました。

木村：感情と自律神経系の関連についての特集を報告した。“感情に特有の自律神経系反応は存在するのか？”，“自律神経系反応は感情に影響を及ぼすのか？”，心理学の初学者でも知る古典的な問題は現代においても未だ解明されていない。しかし，生体計測技術の飛躍的な進歩と神経科学や計算論的手法という新たなアプローチとの融合により，感情と自律神経系，両者の関係性を科学的に検証する舞台はようやく整ったという印象を受けた。今後は，感情研究という学際的領域における我々心理学者の役割をしっかりと認識・実践していく必要があると感じた。

藤村：表情の特集号を取り上げ，「表情認知の普遍性」と「表情認知における文脈効果」について紹介いたしました。これまでの表情認知研究では，表情写真を呈示し，強制選択法によって感情のラベルづけを行う方法が王道でした。しかし，この方法では普遍性を語ることは難しいこと，表情単体ではなく身体のような文脈情報も考慮する必要があるという内容でした。こうした基本感情説を前提にした研究を概観することで，表情研究のみならず感情研究の今後の目指すべき方向性をフロアの皆様と議論し，共有できたことをうれしく思っております。